

# 阪神優勝、大阪が熱狂した夜

## ■新編集講座 ウェブ版 第135号 2019/11/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

新編集講座では、前回「神無月（かなづき）に『神』は『無い』のか」で、「阪『神』タイガース」という名の「神」に触れました。阪神は今季、クライマックス・シリーズで敗退し、日本シリーズ出場はなりませんでした。年配のファンには今も、1985年の戦いぶりが鮮烈な思い出のようです。21年ぶりリーグ優勝を果たし、2リーグ制で初の日本一を達成。大阪の街全体が熱狂しました。興奮に包まれ紙面を制作した地元・大阪本社整理部（現・編集制作センター）の先輩編集者の回想記をご紹介します。

### ■ 思い入れの差くっきり

阪神がリーグ優勝を果たしたのは85年10月16日です。翌日の大阪本社朝刊は1面トップで、宙を舞う吉田監督の大きな写真に目を奪われます＝**図①**。一方、東京本社も1面掲載ながら、紙面の中ほどで写真も一回り小さく＝**図②**、思い入れの差は歴然としています。

私は当時、東京本社整理本部（現・情報編成総センター）の駆け出し編集者。この東京紙面も、実はデスクの指示を受け私自身が組んだものですが、その話は後日に譲り、大阪紙面に話を戻しましょう。

最近でこそスポーツ記事を1面トップで扱うのは普通（ラグビー・ワールドカップの日本戦が好例）ですが、この時代、「トップは政治や経済、国際ニュースまたは大事件」というのが一般的でした。東京の阪神優勝の扱いは、特に冷淡というわけではなく、ごく常識的。その意味で、阪神をトップにした大阪は思い切った判断をしたわけです。

### ■ こどものころからのファン

大阪1面を作ったのは、整理部デスクだった藤田健次郎さんです＝**右欄参照**。藤田さんは後日、大阪整理部の部史に「阪神優勝の夜」という原稿を寄せました。この原稿から引用します（引用部分は楷書体。表記は一部修正しました）。

そのころ硬派デスク＝**同**＝をやっていました。昭和60（1985）年10月16日は、出勤前から1面トップの有力候補がありました。こういう日の朝刊番は、予想通りなら楽勝になります。

というのはこの夜、阪神タイガースが神宮球場でのヤクルト戦に勝つか、引き分ければ、優勝が決まるのです。阪神はシーズン開幕直後から快走を続けました。なんといっても打線が好調。今なお対巨人戦の甲子園で掛布、バース、岡田がスコアボードの右、左に3連続ホームランを飛ばした興奮を覚えています。優勝すれば村山、バッキーのころから実に21年ぶりの快挙というわけです。

こどものころからの阪神ファンですから、この快進撃はこたえられません。いわば個人的な趣味嗜好（しこう）の世界を、万人向けに「どうだ、どうだ」ときっちり紙面化するのですから、めったにない機会です。



（上）①1985年10月17日 毎日朝刊1面＝大阪本社最終版 （下）②同＝東京本社最終版



#### 藤田健次郎さん

1939年生まれ。61年毎日新聞社入社。大阪本社整理部デスク、同部長代理や広島、神戸両支局長などを歴任。

#### 硬派デスク

1面や経済面など「硬い」ニュースの多い面担当を「硬派」、社会面やスポーツ面など「軟らかい」ニュース中心の面を担当するのを「軟派」と呼びます。

## ■ 号泣する編集委員

運命の一戦は、ヤクルトが先行した後、互いに逆転するスリリングな展開。最終回に追い付いた阪神は、その裏のヤクルトの攻撃を封じて引き分けに持ち込み、優勝を果たしました=図③。

神宮球場での対戦は、5—5で引き分け、優勝が決まりました。編集局はどっと歓声があきました。社会部の奥にあった編集委員室からクラッカーの弾ける音が連発したものです。この部屋の住人は、早くからチビリチビリやりながら、経過を見守っていたから、優勝の瞬間にはすでにできあがっている人もいました。

統合版=右欄参照=のデスクは、とりあえず優勝予定稿=同=を4段か5段か（どちらか定かでない）の見出しでハラに据えました=同。ところが、これを見た大のトラファンの編集委員が整理部にやってきてわめいたのです。当番の部長をよびつけて「こんなことがあるんかいな」「阪神が優勝したんやで」。デスク席にまで聞こえてくる怒声と（「阪神をトップで扱え」との）アピール。言い募っているうちに感情が激し、オイオイ泣いていました。

## ■ 内も外も異様な空気に

自分自身の「趣味」、同僚の「号泣」。これだけでは内輪の話ですが、大阪の街全体が興奮と熱狂に包まれていることを知り、藤田さん=写真④=は、阪神を一面トップで扱うことを決断します。

そのうち、梅田駅で群衆が六甲おろしを合唱したり、道頓堀川にファンが相次いで飛び込んでいるとの情報が続々。内も外も異様な空気につつまれてきました。こうして関西経済への波及効果まで飛びだした阪神フィーバー劇は頂点に達しました。

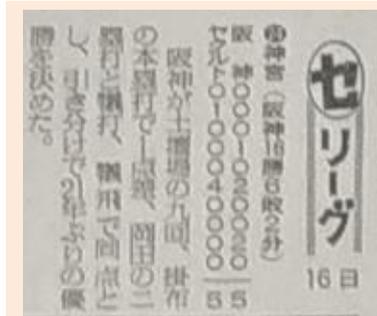
当然、セット=右欄参照=1面は文句なしにトップ。吉田監督が胴上げされて夜空に舞っている写真を大きく扱いました=図①。

当番の交番（編集局次長の異名、「紙面を見張る」のが語源？）がやって来て「なにしろ社会現象や、社会現象や」としきりに口走っていました。これは単なるスポーツの勝ち負けではないという意味のようでした。

今も胴上げされる吉田監督の写真を額にそして、続いて日本シリー

ズで西武を破り、日本一になったときの号外もパネルに入れて自宅の部屋に飾ってあります。

大阪紙面の熱気は、一面以外の、例えば見開き社会面=図⑤=からも見て取ることができます。もちろんスポーツ面でも大展開したほか、なんと別刷り特集までありました。この阪神フィーバーの話は、次号に続きます。



(左) ③ 85年10月17日  
毎日朝刊スポーツ面から  
大阪本社版

**統合版** 大阪本社から遠く輸送時間がかかり締め切りが早いエリア（北陸や中四国）向けの朝刊を「統合版」と呼びます。この地域は夕刊を発行しておらず、夕刊と朝刊のニュースを「統合」して紙面を作成するため、こう呼びます。後述する「セット」（近畿地方向け紙面）とは別のデスクが紙面を作っていました。

**予定稿** 時間のない時に備え、あらかじめ作っておく原稿。「ヤクルトと対戦」「21年ぶり優勝」などそのまま使える内容を中心に書き、当日は、スコアなど最小限の修正で使います。

**ハラ** 紙面中央部を体の部位で例えた言い方。同様に、トップ記事は「アタマ」と呼びます。



(左) ④ 整理部のデスク席で紙面の構想を練る藤田健次郎さん（中央の白シャツ姿）  
大阪本社で1987年撮影

**セット** 統合版とは逆に、大阪本社から近く締め切りの遅い近畿地方（一部を除く）向けの新聞を「セット」と呼びます。夕刊と朝刊を「セットで」発行しているため、こう呼びます。



(左と上) ⑤  
85年10月17日 毎日朝刊社会面  
=大阪本社版